

児の泣きに対する母親の困難感: 生後1歳時における泣きの実態から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34915

児の泣きに対する母親の困難感 — 生後1歳時における泣きの実態から —

金沢大学医学部保健学科 〇田淵 紀子 島田 啓子
 亀田 幸枝 関塚 真美
 坂井 明美

I 緒言

これまでに、児の泣きに対する母親の困難感の実態、およびその困難感に関連する要因について、生後1ヶ月時と4ヶ月時に焦点をあてて報告^{1) 2)}してきた。今回は同対象の1歳時点での困難感の実態を明らかにする事を目的とする。

II 方法

1. 調査対象および方法：石川・福井県内の病産院にて出産し、前回調査の4ヶ月時に回答のあった母親である。1歳時の調査に協力の意思を示した305名に、子どもの誕生頃に自己記入式質問紙調査を郵送し、文書により再度調査の承諾を得、記入および郵送による返信を依頼した。

2. 調査内容：泣きへの困難感を表す項目として「子どもが泣いて戸惑うことがある」、「抱っこしたりあやしてもなかなか泣きやまないことがある」、「泣いた時、自分なりの泣きやませ方がない」、「夜泣き時の対応に困難を感じたことがある」の4項目の他、困難感に関連する子どもの泣きの状態（泣きの状況、泣きの性質、子のリズム、夜泣きの状態等）や母親の生活状況（母親の健康・睡眠状態、夜間の授乳状況、サポート状況）、子どもができてからの生活の変化に対する思いや育児の見通し、育児の充実感、育児負担感、育児の自信感等。基本的属性として、母親の年齢、出産経験、児の性別、職業の有無、母親の性格傾向（楽観的か神経質か）等。

3. 分析方法：泣きへの困難感を表す項目の得点を、よくある（4点）、少しある（3点）、あまりない（2点）、全くない（1点）とし、4項目の合計得点を困難感得点（range 4～16）とし、得点が高いほど困難を感じている母親ととらえた。困難感得点の平均±1SDを基準に、困難を感じている母親群（以下、困難群）、平均群、困難なし群に分け、一元配置分散分析により困難群と他の群で関連要因の差異をみた。また、困難感と諸要因についてPearson's 相関係数（Fisher's 検定）を求め、関連する要因の影響力をみるために、有意な相関を認めた要因を独立変数に、困難感を従属変数として重回帰分析を行なった。統計解析はStatView. Ver. 4.02Jを用いた。

III 結果

1. 対象の概要：調査用紙は305部配布し、251名から回収（回収率82.3%）した。有効回答は250名であり、初産婦122名（48.8%）、経産婦128名（51.2%）であった。子どもの夜泣きは、6～8ヵ月頃が最も多く、その後は減少傾向にあった（図1）。

2. 泣きに対する困難感の実態とその背景：母親全体での困難感得点（range4～13）の平均±SDは8.0±1.8点であった。困難群の母親は51名、困難なし群54名、平均群145名であり困難群における初経別の割合は初産婦22名（43.1%）、経産婦29名（56.9%）であった。困難群の母親は困難なし群の母親に比べて、子どもは一度泣き出したら止まらない、かんしゃくをおこす、以前よりよく泣くととらえていた（ $p<0.0001$ ）。そして夜間に授乳以外で泣いて目覚める児が多く、この母親達は現在・過去ともに夜泣きを認めた。夜間授乳の頻度に有意差はなかったが、夜間授乳に対する困難感には有意に高かった（表1）。また、困難群の母親は、困難なし群の母親より、睡眠に対する満足度が低く、疲れや落ち込んだ気分が強かった（ $p<0.0005$ ～ 0.0001 ）。

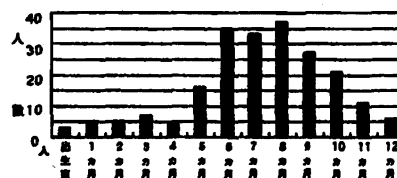


図1. 夜泣きの生後月齢別変化

表1. 困難群と困難なし群における関連要因の比較

	困難群(n=51)	困難なし群(n=54)
初・経別		
初産婦	22 (43.1%)	26 (48.1%)
経産婦	29 (56.9%)	28 (51.9%)
夜間の泣き（授乳以外）	36 (70.6%)	8 (15.0%)
夜泣き過去あり	33 (64.7%)	16 (30.2%)
夜泣き現在あり	20 (39.2%)	3 (5.7%)
夜間授乳回数		
なし	29 (56.9%)	34 (63.0%)
時々	11 (21.6%)	11 (20.4%)
1回	4 (7.8%)	5 (9.2%)
2回以上	7 (13.7%)	4 (7.4%)
夜間授乳困難感（1～4）	2.9±0.8	2.0±0.9
睡眠満足（2～8）	4.8±1.3	5.7±1.7
健康状態（3～12）	7.6±1.7	9.3±1.7
性格（range0～100）	52.6±22.5	39.2±20.9

— $p<0.01$ — $p<0.0001$

3. 困難感に関連する要因と影響力：泣きに対する困難感に有意に関連していた要因のうち、相関係数0.2以上の18要因で、重回帰分析を行った結果、「育児の見通し」、「夜泣き」、「育児自信」、「子の理解」、「泣きの状況」、「睡眠の中断」の6要因で全体の50.9%が説明された。

IV 考察

困難を感じている母親は、初産婦と経産婦の割合がほぼ同じであり、1歳時点の泣きに対する困難感には出産回数によるものではなかった。困難感には子どもの泣きの特徴や夜泣きが大きく影響していることが推察された。夜泣きは母親の睡眠を中断するため、睡眠の満足度も低くなり、疲れが増すことが示唆され、母親にとって大きな負担になると考えられる。

V 結論

1. 1歳時における泣きに対する母親の困難感は、初産婦、経産婦ともにみられ、出産回数の違いはなかった。

2. 困難群の母親は、困難なし群の母親に比べて、夜間に児が泣くことが多く、疲れや抑うつ的な気分が強く、睡眠に対する満足度が低かった。

VI 文献

- 1) 近藤美佳他、1ヶ月児の泣きに対する母親の反応—第1報 困難感の実態とその特徴—、日本助産学誌、14(3)、162-163、2001。
- 2) 広中啓子他、4ヶ月児の泣きに対する母親の困難感の実態とその特徴、日本助産学会誌、15(3)、202-203、2002。